

長州宇部福原家（萩藩永代家老） 家来医・林家旧蔵の蘭方医学書について

中澤 淳¹⁾，亀田 一邦²⁾

¹⁾ 山口大学，²⁾ 九州国際大学

福原家は萩藩の永代家老（11,300石）として長門の宇部，生雲を給領地としていた。福原家の家来医には，1）医師（萩に定住して当主及び家族の診療にあたる），2）宇部医師（宇部在住の家来の診療にあたる），3）生雲医師（生雲在住の家来の診療にあたる）があり，寛政期には6人の医師，3人の宇部医師，1人の生雲医師がいた。

林家は，初代昌豊が享保12（1727）年に宇部医師として福原家に召し抱えられ，2代勝秀，3代実明，4代明信，5代明光と家来医を勤めた。しかし明治になり6代仙輔は地方自治のために尽力し（宇部村長，宇部市長など）医業は継がれなかった。

今回，9代利之氏から同家の書籍28点，201冊が宇部市に寄贈されたが，その中の蘭方医学書を紹介したい。

1)「西洋灌腸録」（写本）は，周防平生出身の岡研介の著であり，蘭書から知ることになった灌腸法について，自らの経験も含めて注入する薬物等を紹介した訳述書である。この本が存在することは以前から知られていたが，今日まで現物は確認されていなかった。序文と跋文から，この書は文政元（1828）年に赤間関（下関）において作成されたものであることが分かる。筆写本ながら，題簽を付けた和装本の形式で製本されていて，出版を意図して作成されたものと思われる。岡研介は，長崎においてシーボルトの鳴滝塾で塾頭を務め，その後文政12（1829）年に下関に寄寓して蘭学塾を主催，さらに大坂に移り開業したが，病を得て帰郷し41歳で亡くなった。シーボルトが長崎へオランダ商館医官として着任したのが文政6（1826）年であるから，この「西洋灌腸録」は，シーボルト来日以前の下関における蘭学研究成果を示すものである。

蔵印からすると，本書は4代明信（順清）（1789-1842）の所持したものである。明信は19歳の時京都で産科医賀川満郷・満定に学び，文化5（1808）年9月に「賀川流医術許可証」が授与されている。また，明信が文化7（1810）年に長崎へ旅行した記録も残っている。シーボルト訪日以前の下関における蘭方医学が，宇部の明信に伝えられたものと思われる。

2)「失伊勃尔杜驗方録」（写本）は，シーボルトと門人達の治験録・処方集であり，これまでに何種類かの伝本が知られている。従来のもとは異なり今回の写本には目次があり，諸熱病，神経病などと疾患別にまとめられ，また処方も強壯剤，健胃剤などと分類されている。内容には既出のものがあるが，異なるものも多い。蔵印はないが筆跡からすると5代明光（順清）（1832-1878）のものと思われる。明光は，京都で山崎玄東，秋吉法眼雲庵に学び，さらに萩において烏田良岱にも学んでいる。林家の書籍のなかには，「学語略説」，「西説医範提綱」，「用薬撮要」，「檜家綱帶尽・檜家煉膏方書」，「窓篤児薬性論」など，明光が使用したと思われるものがある。

3)「續熙亭自製法」（写本）は5代明光のものと思われる。續熙亭は林家の屋号である。ここには「吐乳散」，「利尿散」，「鎮痛和胸散」を含む54の蘭方の処方が記されている。宇部市資料館に収蔵されている8代亮策氏寄贈の「林家文書」の中には，薬種問屋と續熙亭調剤処との取引記録があり，これらの処方が実際に調剤されていたようである。また「林家文書」の中に「書籍控帳」という蘭方を主とする150点の医学書の書名を列挙した冊子があり，明光22歳の時のもので，書籍購入に当たっての控え帳と思われる。

萩藩では，天保11（1840）年に萩に「南苑医学所」が開設され，漢方から蘭方を包括する優れた教授陣による医学教育機関が誕生したが，林家の医師達は独自の方針で，京都，長崎，下関で最新の医学知識をえて，宇部において医療活動を展開していたものと思われる。